

貴重書デジタル化の持つ意義



[参考文献]

櫻村雅章著, 貴重書デジタルアーカイブの実践技法 : HUMIプロジェクトの実例に学ぶ, 慶應義塾大学出版会, 2010.4

貴重書のデジタル化は、元の書物の代替物として閲覧利用する上で、様々な意義を持つ。本の扱いなどを気にせず、パソコンの画面上で簡単に閲覧ができ、意図する箇所を容易に探し出すことができる。Webサイトを通じて広く公開することも可能で、それを利用すれば、一般の人々でもいながらにして遠方の図書館が所蔵する書物を閲覧できる。

比較研究を推進する上でも非常に大きな効果がある。画像処理ソフトウェア等の様々なツールを使い、効率化・高精細化して比較することにより、例えば印刷活字1文字ごとの形状の差異や微妙な位置のずれの調査等も容易になる。パターン認識や分類など、画像処理や情報処理技術を応用すれば、数百ページある書物の全ページを自動的に大規模かつ正確な処理を行うことも可能である。

保存や保護の面でも意義がある。精度が高く忠実なデジタルデータを作成しておけば、その貴重書の今の様子を残しておくこと、つまり現状保存となり、劣化による破損や事故での紛失が起こっても、貴重な情報を後世に伝えていくことができる。また、現物を持ち出す回数が少なくなるため、貴重書そのものの安全確保や保護にも役立つ。

貴重書は概して古く、扱いが難しいため、閲覧可能なのは研究者などに限られ、様々な条件下でのみ閲覧可能、という場合が多い。一般の人々の目に触れる機会は展示会などに限られ、実物に触れることはほとんどできない。これまで、いくつかの貴重書では複製本が製作されてきたが、出版に多大な費用がかかり、広く一般に普及することはなかった。このような状況の中、貴重書デジタル化の持つ意義は、日々大きくなっている。